

文字を読むことも、書くこともできない状況からの日本語指導

— スペイン語を聞くことと、話すことしかできないK君のひらがな・カタカナ指導を通して —

前グアテマラ日本人学校 教諭

岐阜県関市立武儀中学校 教諭 朝田 康裕

キーワード：日本語指導、ひらがな、カタカナ

1. はじめにK君について

K君は、日本国籍を持ちながらも、お父さんの仕事の都合により、小学校1年生になりグアテマラ日本人学校へ入学してくるまでスペイン語だけの生活をしてきていた。また現地の幼稚園では遊びが中心で、アルファベットを覚える必要もなく、まったく文字を覚えていない状況であった。先述したように家庭のベースとなる言語がスペイン語であることから、入学当初まったくといってよいほど日本語を話すことも、読むことも、書くこともできない状況であった。また、スペイン語についてもアルファベットをまったく知らないわけなので、スペイン語を聞くこと、話すことはできるが、書くこと、読むことはできない状況であった。(基本的に母の話すスペイン語から耳や体で言葉を覚えていたということになる)

こういったことから、日本から送られてくる1年生の国語の教科書をそのまま使うことは非常に困難であったため、まずは「ひらがな」の習得に力を注いできた。通常日本で生活している子どもたちは、幼稚園・保育園時代にある程度の日本の単語を理解しているので、発声してあげれば、どう言ったものなのかということ想像することができる。しかしK君については皆無であるため、その方法を使用して、学習することができなかった。

そこで、「絵」を使うことで、そのギャップを解消し、地道に「ひらがな」を習得させていった。また、姉のニコルさん(日本人学校の卒業生)にも宿題等で補助を協力をしてもらうこともあった。そういった中、入学した4月から数え、9ヶ月の歳月をかけ「ひらがな」をマスターすることができた。現在は、どの「ひらがな」も即答できるようになっている。

2. 指導の実際

「ひらがな」を習得する方法として行ったことは、スペイン語の発音で理解できるように絵や言葉を工夫したことである。

<例>

日本の子どもたちへは→ やかんの「や」ですね。(絵もやかんの絵で問題はない)

K君へは → naranja の「な」ですね。(naranjaはもちろん耳で聞いているだけである)

カルタのようなものを用意 → ナランハの絵を描きそのカルタにひらがなの「な」を書いておく。

※ naranja ナランハはオレンジのこと。

つまり、スペイン語の音を使い、絵はスペイン語に合うようにし、文字は「ひらがな」を書いておくカルタを用意したということになる。しかし、まだ6歳ということもあり、スペイン語の単語を覚えている数も少ないので50音分をつくるのが結構大変であった。そのカードを作り上げた後はひたすら繰り返し練習をさせた。前時に学習した「ひらがな」は、必ず本時の学習で確認を行うようにしていった。

発音だけでなく、書きについても毎回宿題として1行(か行ならかきくけこ)を目安にノート1ページ分出していた。この指導を地道に9ヶ月間行った結果、はじめの部分にも書いたがK君は「ひらがな」を完璧にマスターで

きた。

「ひらがな」の習得をしてからは、日本語の単語や、簡単な会話の習得のスピードがグンと上がった。普段の友だちとの会話も日本語で行うようになってきたのである。その時期の成長は著しいものがあった。授業の中での私のスペイン語の量は日に日に減り、彼から発する言葉が日本語が増えていたのも事実である。

3. カタカナ指導へひらがな指導で行った方法を使ってみる（研究授業を通して）

「カタカナ」の習得をすすめる際に、「ひらがな」を指導していたときよりも、K君の日本語の単語力が増えていること、また「ひらがな」をマスターしていること等の理由により、理解のスピードが速いのがよくわかった。

「ひらがな」指導時と違うのは、「カタカナ」指導の時は通常市販されているカタカナカードを使用したことである。これは、K君の日本語の単語力の増加や、この学習を通して、新しい日本語の単語に多くふれさせたいという意図もああったからである（理解できないときは「ひらがな」時同様、スペイン語単語で支援を行った）。

同僚の先生方に、研究授業の中で、K君がどのくらいの力を持っているのか、また授業一時間で新しく習う行をどのくらい習得できるのかを見ていただくことで、K君の現状を知り、来年度以降の指導方法につなげていきたいと考えた。

(1) 授業の目標

○マ行～ヤ行のカタカナを順序がバラバラでも読むことができる。

(2) 先生方に見ていただいたポイント

本時の目標を解決できたかどうかというのも大事であるが、K君がいったい一時間の授業でどれくらいの「カタカナ」（文字）覚える力があるのか、どういった思考過程で習得しているのかということ、認識してもらうことに重点を置いていただいた。以下先生方に説明し、見ていただいたポイントである。

「研究授業より」

<理解レベルを、読む段階では簡単に次のように捉えている>

- ①順序通り読むことができる。（○行を一つの文章として捉えているという意味）
- ②順番が変わっても文字を読むことができる。（○行の○をきちんと読むことができるという意味）

①については簡単にこなすことができると思われるので、（K君は、ひらがなを知っているし、50音の順序を理解しているから）②ができて始めて一つの文字を理解したということになるので、この部分でどれだけK君が力をつけたのかを見ていただきたい。

指導方法について、今回は「カタカナ」カードを使用するつもりである。しかし、K君は絵を理解してもそれが日本語で何かと言うことは確実に理解できない。そこで発音を理解するためにK君が知っていそうなスペイン語の単語も取り入れていくので、その指導についてどう思われるかのご意見を頂きたい。

(例) 「ミ」→「カタカナ」カードではミシンの絵が描かれている、しかし彼にはMaquina de coserとうつるわけで、「ミ」の発音がないのである。

※ミシンはマキナ・デ・コセール

そこで mirar の「ミ」というような補助となるスペイン語を発音する。 ※ mirar ミラール「見る」と言う動詞

<研究授業時のスケジュール>

K君の活動	先生方に見ていただきたい部分
<p>○前時までに学習した「カタカナ」の復習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・順番がバラバラになっている各行のグループを自分で正しい順序に黒板に掲示する ・並べ終えた後答え合わせをし、すべて発音する。 <div data-bbox="220 613 743 725" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>きょうは、マぎょうとヤぎょうをおぼえましょう！</p> </div> <p>○マ行とヤ行をカードを読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・順序通りまず読む ・マ行とヤ行をノートに書く（ノート1行） <p>○<u>カードの絵を使って覚える</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一文字ずつ絵を見て単語を読む ・再度一文字ずつ確認する <p>○マ行とヤ行が覚えられたかどうか確認テストを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に自分で順序通り張り直す <p>○次時の課題を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿題の確認をする 	<p>○一文字ずつ絵を見て単語を読んでいく。</p> <p><マ行、ヤ行を覚えさせるための工夫></p> <p>◎絵と文字の一致により理解させる工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・K君に「これしってる？」と確認を取り、日本語の単語を知っている場合はそのまま指導する。 ・その単語を知らない場合は、スペイン語で同じ発音のある単語を伝え、文字をどう読むのかを理解させる。 <p>◎カードを黒板からはずし、一文字ずつ再度確認をし理解させる工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・K君の場合、いきなり覚えてしまうときとそうでないときの差が激しいので、覚えていないときは一枚ずつ読みと単語を再度見直す。また、スペイン語の単語についても、K君がよく使いそうなレベルの単語で言い直したりして指導する。 <p>○覚えられたかどうかの確認するため自分でカードを黒板に貼る</p>

「授業実践より」

K君の場合、やはり本授業のように「カード」「絵」等を利用した学習がかなり有効であることがわかった。いままで、試行錯誤を繰り返し、一番彼の頭に残る指導を行ってきたが、彼の場合1年生ということでやはり集中力の持続にも問題がある。そういった意味でもカードや絵の使用は彼の心をぐっと引きつける意味でも重要であると思われる。集中力が高まれば、記憶に残る量も必然的に増え、早く文字を覚えることができる。覚えた後は、飛躍的に日本語を発する機会が増えたり、本を読む姿もとても楽しそうである。

今後、K君のような児童が日本人学校へ入学してくることは高い確率であり得ることであり、今年度K君へ行った指導方法を行っていけば、同じように（もちろんスピードに個人差はあるが）「ひらがな」「カタカナ」を習得していくことができるだろう。

この次の問題に「漢字」の習得があるが、これについては今回の授業研で他の先生方が実践された指導方法を使い、地道に一文字ずつ習得していくのが良いのではないかと思う。

4. まとめ

今回の実践を通して、K君のような家庭環境から日本人学校へ入学してくる児童にどういったみちすじで、「ひらがな」、「カタカナ」を指導し、その後の指導につなげていくのかということに自信を持つことができた。日本の通常の幼稚園や保育園から入学してくる新1年生への指導をする以前に、こういった指導をあわてずじっくりと行うことが、先のことを考えてとても重要であるとわかったからである。

また、K君の学校生活での表情や姿に「僕もこの学校の児童なんだ」という意識が、あきらかに日本語を覚えていくたびに高まっているのがよくわかった。友だちと休み時間に遊ぶ様子や、国語の授業以外の教科の時間にも生き生きとした姿で臨んでいたことなどもK君にとってとてもプラスになることだった。自分だけ何か違うと感じていたK君の姿が今はない。

グアテマラ日本人学校であった今回のような事例はきっと中南米を始め、他の国の日本人学校でも今後はあり得ることなのではないかと思われる。他の児童との学習進度の差を気にせず、じっくりと心のケアをしながら指導をすすめていくこと、これがK君のような児童には一番大切なことなのではないかと思う。こういった子どもたちを、取り出し授業のような形で、大切に指導していくことが、保護者への信頼も得ることにつながっていくのだと痛感した。

私は3月で帰国をしたが、K君がその後も楽しく、意欲を持って授業に取り組んでくれていることを心から祈っている。